



連載

## 博聞意伝

世代を超えて未来を語る

72

第16回

河村 幹夫

(ホテルニューグランド顧問)

〔聞き手〕

澁澤 健

(コモンズ投信会長)

### 戦中、終戦時の、 飢えと喪失感からの脱却

澁澤 今回の「博聞意伝」には河村幹夫さんにご登場いただきました。この対談の主旨を改めて申し上げますと、『ほぼづゑ』の先輩諸兄姉から、これまでのお仕事や文筆の周辺のことを私が聞き手になってうかがい、私を通じて次の世代、未来の日本へ向けてのご提言、メッセージとしていただこうというものです。

事前にご提供いただいた資料を拝見して、河村さんの戦前・戦中のご体験を是非若い人達に聞いてもらい

たいと思いました。お生まれは長崎市で、お育ちになったのは名古屋ということでしたね。

**河村** 父親が三菱重工工業本社から長崎の造船所に赴任し、私が生まれて（昭和十年）間もなく名古屋の航空機製作所に転勤となり、私は名古屋で少年時代を迎えました。普通のサラリーマンの家庭ですから格別なこととはなく育ちましたが、私が小学校に上がる頃は、子供心に「戦争の足音」と言いますか、何となく戦争が近づいているなどということは感じていました。それで、私の具体的な戦争体験といえますと、国民学校（昭和十六年施行）での体験です。中国大陸では既に戦火が広がっていましたが、直接影響を受けたのは、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争の開戦であり、その翌年四月に私は国民学校に入りました。

**澁澤** 国民学校というのはよく伺いますが、具体的にはどのような雰囲気のものだったのですか。

**河村** 戦時体制下に入って、初等教育そのものを皇国の体制に沿わせようということでしょうね。一説には当時のドイツのフォルクス・シューレ（国民学校）制度に倣ったものであったと言われています。従来の学校制度を改組して、戦時体制に沿う教育を施そうとい

うことだったのでしょね。私が入った昭和十七年というのは国民学校の初めの頃です。既に戦争が始まっていたから、授業の内容も軍事教練が採り入れられたり、徹底した思想教育がなされていました。当時私なども「日本は必ず勝つ」と思い込んでいました。ところが、次第に空襲が激しくなつて来て、昭和二十年の五月、集団疎開で名古屋から飛騨高山の山奥の小さなお寺に行かされました。私は当時四年生でしたが、二年生から六年生まで三十人くらいのグループが組まれていました。これは戦火を逃れるというよりも、今思えば将来の戦士を温存するという意味合いもあったのではないでしょう。引率する先生の数も少なく、ことさら勉強をするでもなく、ただ空腹を抱えて集団で生活をしていました。疎開したところも大変な寒村で、米や麦はおろか、もともと稗ひえや粟あわでかろうじて生活をしていました。ただ、戦中ということもあって、上級生が下級生を取り仕切る、軍隊の疑似組織のようなものが出来ていました。そして、終戦を迎えた頃にはみんな栄養失調の状態でした。

**澁澤** 終戦のことはどのように知らされたのですか。

河村 お寺の本堂に集められて、整列をさせられてラジオを聞かされました。ラジオの音声も悪く、その折は何も意味が分かりませんでした。引率した二人の先生が深々とお辞儀している様子から、異様なものを感じ、終わつたんだな、と思いました。……すると、一緒にいた女の子のひとりが、「お家に帰れるんだ！」と言つたものですから、そうだ「帰れるんだ！」という思いが拡がりました。

澁澤 すると疎開生活は五月から八月までということでしたか。

河村 名古屋に帰る汽車の都合がすぐには付かず、結局十月まで留まることになりました。その帰りの汽車にしても貨物用の無蓋車に分乗して、あのトンネルの多い高山線を煤だらけになりながらも、皆な、家に帰れる、ということ浮き浮き帰つて来ました。しかし、ご承知のように名古屋はひどい空襲を受けており、疎開児の半数近くは、家も焼かれ親も亡くなつてゐるという状況でした。いきなり天涯孤児です。私の場合は家も親も無事でしたが、……そうしているうちにも学業も再開されたのですが、焼失した校舎の替わりに鶏舎跡が教室になり、机の替わりは、それぞれ持ち寄つ

た卓袱台やリング箱などでした。驚いたのは先生の豹変振りでした。このあいだまでは皇国教育一辺倒だったのに、同じ先生が一転して軍国主義の否定を論じていました。

澁澤 私の父親はもう少し上の世代の年齢ですが、やはり教師が一八〇度豹変したと言っていました(笑)。

河村 やはりそうでしたね。国中が混乱の極みにありました。……この頃か、大人への不信感が芽生えたのはこの頃でしたね。……この頃からでしょうか、私は、威張る、ことと、ひけらかす、ことが大嫌いで、今に至るまで自らに課した戒めとしていますが、これも戦中、終戦直後に受けた強圧的な訓育への反発なのでしょうかね。

澁澤 そういう、大人から与えられた価値観の変転に直面して不信の念を募らせたということですが、では何が河村さんを今日まで支えて来たのでしょうか。

河村 当時はまだ小学生から中学生になろうとしていた頃ですから、格別にこれといった信条があった訳ではありませんが、飢えの辛さ、何もかも無くなつてしまった喪失感を味わつて、強くならなければ、生き抜かねば、という思いを子供ながらに強くしたことは確かですね。その後、中学、高校と進みましたが、これ

は私だけではありませんでしたが、慢性的な栄養失調もあつてか、私は病氣になつてしまいました。肋膜炎と言われましたが、特效薬が容易に手に入る時代ではありません。したがつて気長に養生するしかなく、病床の中で私は、「どうせ長生きできない身体なのだから、その短い時間の中で思い切り生き抜いてやろう」と思うようになりました。それと、なんと言つても支えとなつたのは友の友情と、師の恩です。学校の手引き帰りに私の病床を見舞つた友人が、その都度宿題を届けてくれたこと。そして出席日数が足りない私をかばつて無事進級させてくれた恩師、これらのことが私の大きな支えとなりました。そういう苦難の時期だったこともあつて、人からいただいたご恩は忘れることが出来ません。

**澁澤** 戦中、戦後と大変苦勞をされて来ましたが、周囲の方々からのご厚意にも恵まれましたね。それで、河村さんは今日まで文章を善くされていきますが、少年時代からの習慣もあつたのですか。

**河村** 父親からの影響が大きいですね。普通のサラリーマンでしたから過分なものではありませんでしたが、常に本を与えてくれて、本を読むように仕向け

てくれました。『綴方教室』（大木頭一郎、清水幸次共著 昭和十二年）もその一つで、読まされて書かされました。よく覚えていますよ。ともかくこの時期は病床に伏せていることが多かつたですから、本を読む時間は充分にありました（笑）。そんなに裕福でもない家計からやりくりして、それに当時は今のように本が溢れている時代ではありませんでしたので、よく探して買つて来てくれたものと、父親、母親に感謝しています。ディケンズの『二都物語』（佐々木直次郎訳 昭和十一年）などもどこからか探して来てくれました。

### 短く人生、どう完全燃焼するか

**澁澤** 病臥ぎみだったとはいえ中学、高校を経て大学に進まれたのですが、その経緯はどのようなものだったか。

**河村** 昭和二十九年に一橋大学に入りました。私は現在八十歳を超えて元気に過ごさせていただいています。が、虚弱體質と診断された少年時代を経て来た身とすれば、短く人生、どのようにうまく完全燃焼するか、という思いが常にありました。仮に横軸が時間で、縦軸が集中力だとすると、私の場合、体力的に横

軸が人よりも圧倒的に短いと思っていましたから、縦軸の集中力を上げるしかありません。ですから計画的に、〇何時何分からは〇〇をして、何時何分までは△△を集中してやる〇〇というように自らを律していました。これしか、短い人生で人に伍して行く方法はないと思っていました。

そして、その完全燃焼のステップ・ワンは、親元を離れて東京の大学で寮生活することだと決めていました。東京を選んだのは、読書の中で気に入っていた国木田独歩の『武蔵野』の情景で、広大な雑木林に包まれて勉強することへの憧れでした。そして名古屋では大学進学を目指す生徒の導き書は圧倒的に『蛭雪時代』であり、当時『蛭雪時代』で紹介されていた、赤松の林に囲まれた肅然とした学舎まなびやが眼に付きました、それが一橋大学でした。幸い大学に入ることが出来て、憧れの寮生活も満喫することが出来ました。その寮生活は四人部屋で、聞き及んでいた旧制高校時代の寮生活を彷彿させる、まさにバンカラなものでしたが、その寮生活は、それまでの自分の内向き加減の殻を微塵に打ち砕いてくれましたね。このことでも大学と寮での生活に感謝しています。

澁澤 そうですか。河村さんの明朗で痛快なお人柄の原点は、一橋大学の寮生活にあったのですか(笑)。そして、社会人として三菱商事に就職されますね。

河村 昭和三十三年に三菱商事に入社しましたが、就職には紆余曲折がありました。昭和三十一年に〇〇もはや戦後ではない〇〇という経済白書が出されましたが、朝鮮戦争(一九五〇―五三/昭和二十八年)が終ったばかりで、当時は大変な就職難でした。在学中の二年生の頃でしたか、寮の先輩から誘われて、運輸省(当時)の案内業(ガイド)試験に合格しましたので、外国人が多く宿泊するホテルに向き、滞在する外国人の観光ガイドをする仕事をした時期があります。講和条約の締結(一九五二年/昭和二十七年)後、日本を訪れる外国人(多くはアメリカ人)が増えていて仕事は多くあり、痛快な出来事も沢山ありましたが、これは結構な収入になりました。そして、うまくいかなかった話としては、日本生産性本部(当時)の同時通訳の仕事がありました。提示された多額の報酬に幻惑されて、最終の講習実地試験に応じたのはいいのですが、試験の内容は録音されたハマーシヨルド国連事務総長のスピーチを同時通訳するというもので、英会話には多少自信が

あったものの同時通訳という意味が分からなかった私は、スピーチのセンテンスの区切りまで黙然としていて、大いに苦笑されてしまいました（笑）。

そして、いよいよ卒業が近くなり、私は以前から教師になりたいと思っていたのですが、教職課程を取っていませんし、それは一朝一夕には難しい。それで、父親が三菱重工に勤めていた経緯もあり、ご縁を得て三菱商事の募集に応じることになりました。ただ、当時は戦後復興のまだ途上期にあり、生産業、物作りが最優先の時代でしたから、商事会社は今のように羽振りのいいものではありませんでした。

澁澤 三菱商事に入られて、海外勤務をされたのは、最初はアメリカですか。

河村 そうです。入社して六年間、やはり寮生活をしましたが、結婚を機に海外勤務となり、ニューヨークに転勤になりました。昭和三十九年（一九六四年）の春で、東京オリエンピックは見る事が出来ませんでした。当初十カ月は単身赴任でした。

澁澤 私の父親は一年間単身赴任でした。東京銀行です。

河村 うちも十カ月でしたね。そして実際に生活をし

てみて、アメリカの物質文化の豊かさには驚きましたね。ケネディ大統領が暗殺された（一九六三年十一月）翌年でしたが、ベトナム戦争が泥沼化する前の、ある意味でアメリカが輝いていた時代ではなかったでしょう。自信に溢れていましたね。まさにブロンディ（人気のマンガ）の時代ですよ（笑）。

澁澤 国民学校時代に「鬼畜米英」として教えられたアメリカとは、大きく実像が違ったということですね。河村 違いましたね。当時日本からニューヨークへの直行便はなく、西海岸で乗り継いでネバダ砂漠を越えて、更にさらに飛行機で飛んで、やっと行き着くのですから。こんな国と、よくも戦争しようなどと考えたものだ」と啞然としましたね。戦中、終戦直後の体験は辛いものですが、改めて「戦争に負けてよかったんだ」と思いました。……そうして三年間アメリカに居て、子供も生まれて、それからカナダのモントリオールに転勤になり、カナダに五年居ました。

その間にモントリオール万国博覧会（一九六七年／昭和四十二年）があり、モントリオールの次が日本（大阪万国博覧会ということもあって、日本からの視察のガイドをしたりしていたのですが、どうも体調が思わし

くないので診てもらったところ胆石だということで、現地の病院で手術してもらいました。

そうして都合八年間の海外生活を終えて昭和四十六年（一九七一年）に日本に帰りました。その間一度も帰国しませんでしたから、日本の素晴らしい活動時期を見ないでいました。まるで浦島太郎のようなもので、帰国当初、変貌甚だしい日本での環境不適合はひどいもので、胃潰瘍で倒れてしまいました（笑）。

澁澤 それは大変でしたね。次の海外勤務がロンドンということになるのですが、ゆっくり養生される時間はあったのですか。

河村 帰国して三ヶ月程療養して、その後十年間日本に居ました。ロンドンに赴いたのは昭和五十六年（一九八一年）です。私も四十六歳になっていました。はじめにお話したように、短い人生、どう完全燃焼するか」ということばかり考え続けて来ましたから、ここまで来れば、残りの人生はやれるだけ頑張つてやろう、自分の人生の正念場だ」と思いました。

ロンドン支店の非鉄金属部長として赴任し、さらに日本、英国、米国の合弁会社である先物取引専業会社、トライランドメタルズ社の経営に携わりました。ロン

ドンの金融・商品・保険・海運などの機能が集中したシティーと呼ばれる一角に、私が関わったトライランドメタルズ社が会員資格を持つ、ロンドン金属取引所（LME）がありました。この取引所は世界最大規模の非鉄金属専門の取引所で、ここには会員資格を持つ会社の代表者たちが毎日定時に集って、仕事のことを語り合つて談笑したり、一杯やつたりして相互の信頼関係を確かめ合うのが習わしになっていました。そうした三十人近い「親方衆」の中で有色人種は私だけで、色々努力しても本場に打ち解けるのは至難のことでした。……そこで私は一計を案じました。共通の話題を持つことです。そこで「名探偵シャーロック・ホームズの登場」であり、そして本を出すことです。

澁澤 まず、出版のお話から伺いましょうか。

河村 「虚弱体質」を抱えながら、なんとかサラリーマン生活を頑張つて来ましたが、先にもお話ししましたように、私は「教育者になりたい」という希望が元来あり、「サラリーマンで一生を終わりたいくない」という思いを捨てきれませんでした。ロンドンに行く前にそのことを大学教授をしている友人に相談したところ、「教壇に立ちたいのなら本を書くことだよ。何で

もいから沢山本を出すことだ」とアドバイスされました。そこで、ロンドンでの私の仕事の一つである先物取引に関する本を二冊出しました。一冊目はイギリスの先物取引に関する『商品先物取引の世界 フューチャーズ・ビジネス』ロンドン編（共著 東洋経済新報社 一九八三年）という本で、二冊目は『ザ・シカゴマーケット 先物取引』（東京布井出版 一九八四年）というアメリカの先物取引を扱った本です。そして、ミルトン・フリードマンというノーベル経済学賞を受賞されたアメリカの経済学者がいますが、我々先物取引を行う者にとつては、大変見識が高いとされている方で、先物取引はなぜ必要か」という主旨の有名な論文があり、本を出す時に参考に読ませていただきました。そしてその論文の中に、言葉遣いが間違っていると見えるところを一箇所見つけました。それで、その箇所を質問するというのを口実に、フリードマン氏に会いたい、会って私の著書、二冊目の本のレコメンデーション（推薦文）を書いてもらいたいと思いました。——この頃になると、先ほど来申し上げているように短い人生、駄目で元々」と思い込んでいましたから（笑）。——そして、イギリスの仕事仲間を通じて紹介

していただき、お目に掛かれることになりました。当時の私の職分は比較的時間の融通がついたものですから、アメリカのシカゴに飛んで、シカゴ経由で、サンフランシスコのお宅にフリードマン氏を訪ねました。その折、日本語の校正刷は持つていましたがブリーフィング資料を持つておらず、目次部分をホテルの便箋に手書きで英訳してそれを持つて行きました。フリードマン氏の住まいは立派なマンシヨンの一室で、約束の時間通りにお訪ねした私を、思っていたよりも小柄なフリードマン氏は気さくに迎えてくれました。挨拶を終えて、なに用で来たのか」と問うフリードマン氏に、私は「あなたの論文を読ませていただいて大変参考になりました。ただ一箇所、用語の間違いがあると思っています。そのことをお尋ねしたい」と申し上げました。すると「君にあげられる時間は十五分間だ。その範囲内で間違っているところを言いなさい」というやり取りが始まりました。……実のところは単なる用語の選択の相違いです。それよりも私は、眼の前のフリードマン氏に現在進行中の私の著書へのレコメンデーションをお願いしなければなりません。……用語の選択の誤りを滔々と述べて、「この用語の選択



の違いは全く異なった文意となります」と説きました。するとその箇所を二、三度読み返した末に、「君の言う通りだろう」というフリードマン氏の諒解を取り付けて、私は「実は、今私は『アメリカの先物取引』に關する本の出版を進めています。その文中に、あなたの論文からの引用をさせていただきませんか。クレジット（引用部分の明記）、用語の適正使用はお約束します」とお願いして諒承を得ました。さらに、「ついではあります、私の本にあなたからのレコメンデーションを戴けませんか。『アメリカの先物取引』などという本は、フリードマンさんからのレコメンデーションがなければ、日本ではとても売れません」と言つて、持参した手書きのコンテンツ（目次）を差し出しました。「俺はそういうことはしないんだ」と言つておられました、もう約束の十五分はとうに過ぎていて、出掛ける約束でもあったのかローズ夫人（やはり経済学者で法学者でもあるアーロン・ディレクターの妹）が再三督促しに出てくる始末。「こいつが帰らないんだよ!」「まだ話が終つていません!」という押し問答の末、手書きのコンテンツによる口頭試問のよくなやり取りがあつて、「でも駄目だよ。書かないけ

ど、念のためにその出版社の名前とアドレスを書いておきなさい」というお言葉を戴き、鄭重にお礼を言つて、『でも駄目だろうなあ』と思ひながら帰つてきました。……ところがひと月ほどして東京の出版社から電話が掛かつて来て、「フリードマン先生からレコメンデーションが届きました」という報せがありました。嬉しかったですね。でも結局その本は売れませんでした（笑）。

### より高い目的意識を持つて

澁澤 『駄目もとの短い人生』どころか、キチツと段取りの出来た素晴らしいストーリーですね（笑）。

さて、『名探偵シャーロック・ホームズ』のご登場を願ひましょうか。本日、河村さんはシャーロック・ホームズ関連グッズのネクタイを締めてお出でいただいておりますが。

河村 先ほど、ロンドン金属取引所（LME）の会員資格を持つ会社の代表者の三十人近い『親方衆』の集まりの中で有色人種は私だけだったと申し上げましたね。三菱商事からの出向代表としては私で四代目だったのですが、本来ライバル会社の代表の集まりで、し

かも白人主体ですから、本当に打ち解けるには彼らと共通の話題を持つことが必要だと私は思ったのです。そこで普段の会話の中で出てくる、シャーロック・ホームズに思い当たりました。ある時、私は会社のスタッフに、「私はシャーロック・ホームズの研究者になる」と公言しました。

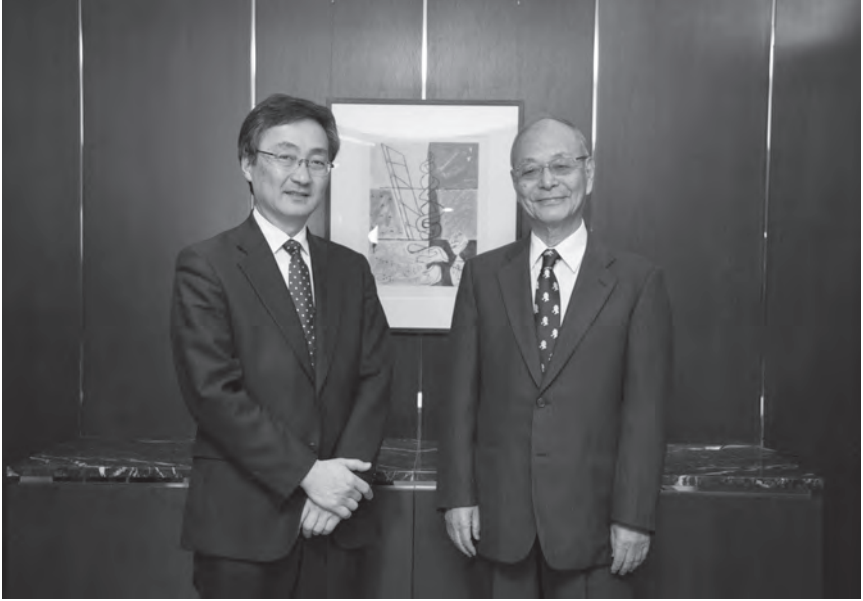
それから私は、仕事の合間と余暇に、シャーロック・ホームズ研究に打ち込みました。原書、カメラ、地図をバッグに入れて、ロンドンの街をシャーロック・ホームズの後を追って歩き回りました。そして、その成果は当然、「親方衆」との集まりでの、私の熱い語りと報告になりました。次第に他のメンバーから関心が寄せられ、細かいコメントやアドバイスを寄せられるようになりました。同好の仲間も増えて、勧められてロンドン・シャーロック・ホームズ協会に入会することになり、さらに仲間も増えました。

それらの成果をまとめたものが、『われらロンドン・ホームズ協会員 シャーロック・ホームズ紀行』（筑摩書房 一九八八年）、『シャーロック・ホームズの履歴書』（講談社現代新書 一九八九年・日本エッセイスト・クラブ賞受賞）として公刊されました。私のシャーロッ

ク・ホームズ探訪は、当初たしかにロンドン金属取引所の代表者の集いでの円滑な人間関係構築のため、ひいてはイギリス・ソサエティに入りたいがための手段ではありましたが、世界中のシャーロキアン（イギリスではホームズアン Holmesian）同様に、今はすっかり魅了されて、入れ込んでいます。

澁澤 愉しいお話を沢山うかがいました。最後に河村さんから、次の世代、未来の日本へ向けてのご提言、メッセージをいただきたいと思います。

河村 こうしてお話して来ますと、私は、短い人生をどう生き抜くか、ということをもットーとして来ましたが、結果としては結構長く生きて来ました（笑）。今思えば、あの戦中、戦後を生きて来た日本人は、何もない時代から今日の繁栄を築いてきたのですから、われわれはこれをプライド（誇り）としていいと思っています。そうして勤勉に、遮二無二生きて来て、昭和三十三年頃でしょうか、一般的にはまだ決して裕福ではありませんでしたが、復興途上の、国も人も若い貌かおをしていたし、生きる希望が見えてきた時代でもありましたね。その伝で言うと今はどうでしょうか。大学で学生と接触する生活をしているので分かるのです



澁澤 健、河村幹夫氏

が、生まれてきた時から既にある程度満たされていて、  
「どう生きてゆくか」とか自分の希望を「どのよう  
膨らませて行くか」など、あまり切実に考えていない  
し、そうした手掛かりを持っていないように見えます。  
常に充たされているから、奮起して躍進しようとか、  
海外に出てまで学ぼうというような、切実な目的意識  
も希薄なのかも知れませんね。しかしこのままでいい  
筈はなく、より高い目的意識をもって、それに向かっ  
て躍進するような意欲を持ってもらいたいと思います。  
これからの背負う若い人達がそうでないと、この先日  
本は大いに心配です。

澁澤 「より高い目的意識」をということですね。あ  
りがとうございました。

(かわむらみきお／しぶさわけん)

(二〇一六年三月十五日収録)